深沢七郎

遠丸　立

沖積舎

遠丸　立（とうまる　たつ）
1926年　北九州市に生れる。
1955年　東京大学経済学部卒業。
主　著　『吉本隆明論』（思潮社）『死の文化史』（泰流社）『無知とドストエフスキー』（国文社）『記憶の空間』（白地社）詩集『海の記憶』（砂子屋書房）

深沢七郎―文学と、ギターと
昭和六十一年九月三十日発行
著　者　遠丸　立
発行人　沖山隆久
発行所　株式会社沖積舎
東京都千代田区神田神保町一―五二一　郵便番号一〇一
電話二九一―五八九一　振東京三―一七七六三二
シナノ印刷＋美行製本
作家論叢書⑩

深沢七郎

——文学と、ギターと

遠丸　立

沖積舎

深沢七郎——文学とギターと

遠丸　立

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目

次

一　ユートピアン　深沢七郎――7
二　「楢山節考」と、おりん
　　ユートピアとしての老婆――25
三　深沢七郎と夢――57
四　病気のおとしまえ――75
五　『甲州子守唄』とナショナリズム
　　中野重治・深沢七郎――93

六　深沢七郎は戯作者か？――115
七　円空を合わせ鏡にして――123
八　『みちのくの人形たち』そのほか――149
九　聴覚的文体
　　ギタリスト・擬音・石和言葉――171
年　譜――208
あとがき――215

一　ユートピアン　深沢七郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1　遊びの人生

私が深沢七郎にたいしていだく興味の質は、端的にいうなら、「世の中にはこういう人種もいるんだなあ」という一種の羨望をまじえた感慨にある。その異様な「庶民」ぶりが、私のなかにある感銘を印するのだ。あるいは「こんな人柄の男は、ジャーナリズムの楽屋では相当いためつけられただろうな」……そういう同情にちかい一種の感慨だといってもいいだろう。

作家・深沢七郎にも興味がないわけではない（このテーマについては稿を改め以下の章で論じることにする）。が、目下の私の興味の中心は、主としてそういう方面にあるわけだ。深沢自身作家廃業を宣言しているし、作家としての深沢七郎は、すでに過去のひとであるような感じさえうける。ギター弾きから小説家へ、小説家から百姓へ、百姓から百姓兼今川焼屋へ、今川焼屋から……というふうにその時どきのおのれの欲するまま「職を転々」として恬然たるおもものの自称「庶民」深沢七郎という男のほうが、いまの私には正直いっておもしろいのだ。

私は深沢に関して「こういう人種」「こんな人柄の男」といまいった。これにもう少し説明を加えれば、あらゆる人間の営為においていわゆる「素人」の枠をはみだすことなしに、いいかえれば「専門家」の範疇を拒否し素人性にあくまで執するなかで、どれだけの質と量の仕事をひとは為し

うるかという主題に関して、体当りの実験をこころみている人間ということになる。

人間の生きかたにおける反専門家志向という路線を意識的に明確に打ち出しながら、しかもただのんべんだらりと無為に時間を徒食する態度とは裏腹に、そのかぎりにおいて最大限に仕事を完遂しようと意志している人間のサンプルなのだといってもいい。そして小説の世界におけるその種の実験が「楢山節考」であり、『笛吹川』であり、『甲州子守唄』であるわけだ。ことわるまでもないが、私はこの場合「素人」という言葉をケナす意味で使っているのではけっしてない。むしろ逆に彼の生の軌跡と作品の独自性をきわだたせるキー・ワードとしてそういう言葉をえらんでいるのだ。

深沢七郎は、彼のもともとの家業たる印刷屋の手伝であったときも、ギタリストであったときも、小説家であったときも、百姓専業であったときも、この意味での「素人」を押しとおしたと思うし、また百姓兼今川焼屋であるいまも、押しとおしていると思う。すくなくとも彼の意識においては「素人性」に徹していたし、また、いまも徹していると思う。彼はエッセイ集『流浪の手記』の「あとがき」にこう記している。

「ボクの過去は、みんな流浪の旅ではないかと思う。あの問題になった小説『風流夢譚』から旅がらすのような流浪生活が始まったと思われているが、よく考えると私はそんなことを繰り返していたのだった。これは住むところが転々と変ったことばかりではなく、職業もそんな風に変ったの

である。（略）赤帽や行商人などは、とくに面白かったのでまたやってみたいが、ギター弾き、小説書き、どれも本職ではなく趣味である。（略）小説を書くことも好きだが、随筆を書くほうが好きである。」

深沢の「……をやってみたい」という種類の発言は、その場のなりゆきしだいで口から飛び出るきらいもあるが、最近では「バーや屑屋もやりたい」（『現代』十月号）などともいっている。

深沢はまた、金に困って線路工夫のアルバイトをやっていたころの思い出をつぎのようにつづる。

「私は金に困ればなんでもやったものだった。同じ仕事をするのは嫌いで、したことのない仕事をした方が楽しいからだった。これは、金持がいろいろな、珍しいたべものを食べたいのに似ているのかもしれない。線路工夫も慣れている者と、私の様にその場かせぎの者とは持場も違って、慣れている者は4人で1組になって枕木と枕木の間を先の平たいツルハシで突き固める仕事をするのだった。線路の土に高低が出来て枕木が浮いている所へ砂利を突き固めるのだが、4人でやれば平均に固くなるからである。私のはシャベルで枕木と枕木の間の土を真中へ盛り上げる仕事で、そのあとを4人組が砂利を突き固めるのである。だから私は4人組とは離れて1人で、遠くでシャベルを使っていた。」（『庶民烈伝』序章）

これはまさに深沢の人生に処する姿勢のすべてをいい得て妙、と評すべき構図である。深沢のこれまでけみしてきた人生コースは、まさに彼自身の筆になるこの線路工夫の自画像のなかに、過不

足なく浮き彫りされているとみることができる。

いうまでもなく作家・深沢七郎の場合も例外ではない。いわゆる世の職業作家をこの構図における四人組の慣れた線路工夫と考えれば、「楢山節考」を発表して以後の小説家・深沢七郎の図は、この四人組からひとり離れた臨時傭いの線路工夫の自画像にそっくりそのままあてはまるではないか。

深沢七郎には、無邪気というか天真爛漫というか、むしろいっそのこと一般生活者がある程度共有する鈍感さといったほうがぴったりするが、そういうきわだった鈍感な要素が濃厚にまといついていて、彼を小説家の次元であつかう場合でも、それが最大の特徴になっていると思う。

そういう鈍感さにおいて、「鋭敏な感覚」を誇る「職業作家」の諸先生がたを威圧している風情があるのだ。また、そういうふうな鈍感さをいわば逆用することで、人間性の深奥にひそみかくれている秘密の部分を、より赤裸々に、より鋭く、あばきたてる絶妙な力が発揮されるわけだが、これはやはり「素人の小説書き」からくる長所なのだと思う。

「楢山節考」や『笛吹川』のもつ衝撃力は、そういう種類のものだ。つまり専門の小説家の筆とは異質の素人性に徹したところからくる衝撃力の凄さなのである。

深沢があらゆる人生の行為において「素人」の枠からはみだすことを欲せず、「素人」のなかにおのれを閉じ込めることに唯一の生存理由をみいだしている事実を、つぎに「素人としての小説家」という一点にしぼり、若干の例をあげて説明してみたい。

まず彼、深沢七郎の小説のきわだった特色は、造型された作品世界の非歴史性にある、ということが指摘されなければならない。表面上どんな歴史時点をあつかっていても——たとえば『笛吹川』のように武田信玄時代をあつかっていても——登場人物たちは、根本のところですべてこれ現代の庶民の群像にほかならぬということだ。作者がしたしく実見している現代人の心性によって大根のところ人物たちはあやつられている。『笛吹川』を一読した読者なら、そのことはだれしも異存はないだろう。小説の舞台の時代を信玄時代に設定しながら、そのじつ現代の庶民そのものを作中に濶歩させている。しかも特徴的なのは、そういう時代的な考証や配慮を作者は完全に無視していながらまったく平気でノホホンと筆を走らせるその無神経さである。つまり素人性を押しとおすことからくる極度の鈍感さは、小説作品の場合まずこのような構成のなかにあらわれる。

「楢山節考」にしても同じことがいえる。作者は作品の時代は明示してないが、ストーリイから推して「相当なむかし」に設定されていることはまずまちがいない。にもかかわらず人物たちは、現代日本の山奥の百姓と心的に等価にえがかれているといったぐあいである。要するに極論すれば、「楢山節考」も『笛吹川』もそういう意味では現代小説なのだ。「楢山節考」はつぎのような出だしではじまっている。

山と山が連っていて、どこまでも山ばかりである。この信州の山々の間にある村——向う村のは

ずれにおりんの家はあった。家の前に大きい欅の根の切株があって、切口が板のように平たいので子供達や通る人達が腰をかけては重宝がっていた。だから村の人はおりんの家のことを「根っこ」と呼んでいた。嫁に来たのは五十年も前のことだった。この村ではおりんの実家の村を向う村と呼んでいた。村には名がないので両方で向う村と呼びあっていたのである。（略）

その日、おりんは待っていた二つの声をきいたのである。今朝裏山へ行く人が通りながら唄ったあの祭の歌であった。

楢山祭りが三度来りゃよ
　栗の種から花が咲く

時代的な考証の欠如の具体例をひとつ挙げよう。『笛吹川』の末尾に、戦乱のどさくさに巻きこまれ、家族全員をたたかいで死なせたギッチョン籠の当主定平が、すでに老境をむかえ、ただ独りあとに残され、死体が流れてくる笛吹川で「米をといでいる」情景が以下のように述べられる。

その晩、笛吹橋の上では村の人達が騒ぎながら遠い火事を眺めていた。誰かが火事の方へ指をさして、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com